

## ■ アガパンサス・・・



7月の訪れとともに、梅雨前線の動きが気になる時節となりました。たとえ晴れの予報が出ていても昼過ぎには雲が広がり強烈な蒸し暑さを感じる毎日です。そんな時に目にするブルー系の花々は、まさに雲間からのぞく水色の空にも似て、少し心和むひと時を与えてくれるものです。

8号棟の西側、すっかり緑濃くなったいちょう通りに沿って、そのブルー系の花の1つ、アガパンサスがつぼみを膨らませてきました。これから梅雨明け頃まで薄青紫色の小花を放射状にたくさん咲かせ、その爽やかな花色に心癒やされます。かなり大型の植物で1メートル近くまで成長するものもありますが、全体の印象は清くしなやかで、すっと立つその姿は凛として涼しげです。



アガパンサス (Agapanthus) とは、ギリシャ語の「アガペー」と「アンサス」との合成語で「愛の花」という意味です。アガペーが「愛」、アンサスが「花」を意味する言葉です。

花言葉は、「恋の訪れ・知的な装い・恋の季節・恋の便り・優しい気持ち……」と盛り沢山です。「アガペー」の名を冠していることがこれらの花言葉の由縁でしょう。

一般的には、恋愛を指す「エロス」に対して「アガペー」はキリストの説く「神の愛」を示す言葉とされています。個人的なことですが、学生時代に出された哲学のレポートに「エロスとアガペーについて対比して論ぜよ」みたいな課題が出されたように記憶しています。もしもこの方面にお詳しい方がいらっしゃったらご教授いただければ幸いです。

本題に戻ります。このアガパンサスは別名「ムラサキクンシラン」とも呼ばれています。しかし、実際のクンシランとは何のつながりもなく、アガパンサス (写真下左) はユリ科、クンシラン (写真

下右) はヒガンバナ科の植物です。ただ花の付き方と葉の形状が似ているので、そのような名前がついたと思われます。英名は「アフリカン・リリー」と言いますが、南アフリカ原産であることを鑑みればこちらの方が実直で納得できます。

茎を傷つくとネギやニンニクに近い匂いがすることでも分かるようにとても強く丈夫です。手間要らずで植えっぱなしでもよく育ちますが、寒冷地では戸外で冬を越せないようで、関東が限界だと言われています。

